

# 日英交通史料(十)

## Bibliography of Anglo-Japanese Relations (X)

武藤長藏

(241)

諫早家系圖中英艦フェートン號(H. M. S. "Pacton" at Nagasaki in 1808)の事件に關する記事

昭和七年二月二十日發行本年報第十二年第二冊掲載日英交通史料(八)に收録の(237)長崎縣立長崎圖書館に保管寄託され居る長崎縣諫早の諫早男爵家所藏諫早文庫中に私の發見した英艦フェートン號事件の史料である[文化五年辰七月より十二月迄の日記御當番貳番なる一綴の日記寫本中の一節を掲げて置いた。

然るにそれと前後して私は諫早男爵家に在職の古賀篤介氏(前諫早小學校長)より諫早家系圖中英艦フェートン號事件に關する記事の報告を得たから之を乍遅延引用掲載したい。

又古賀篤介氏は日英交通史料(七)に掲載の崎陽日録(丹治舉直著)中諫早家に關する記事

に就ても説明を試み小生宛に報告されたから同氏の報告的書翰の儘に引用して置く事とする。

古賀篤介氏の書翰は昭和六年十一月六日附にて最初に報告し昭和七年八月十四日附にて重ねて其謄寫を送られた。私は散逸を恐れて古賀篤介氏の最初の報告を其儘掲げて置く。

昭和六年十一月六日

古賀篤介

武藤長藏様

拜啓初冬之候に相成候處愈々御健在御熱心に御研鑽之段奉感謝候  
豫ねて御研究被遊候日英交通史料(六、七)貳冊特に御贈與に預り御蔭にて諫早領主の長崎港鞏固に關係して居られ候事情明に相成深く御禮申上候

諫早家系圖中記載の分は左之如くに有之候

文化五年八月。嘆夷舶至崎港。先發我邑兵士遣使報之鎮臺。時賊設詐術捕和蘭酋長。崎鎮大驚擾。茂圖在邑會臥病聞變則起勉病至長崎大張軍威以備之。留三日而夷船逸去。茂圖乃還公賜御褒詞。且慰勞兵士。  
(茂圖公は諫早家第十一代の領主別名豐前又は播磨文中公と云ふは佐賀藩主の事也)

日英交通史料七、四〇頁十一行に「佐嘉家老諫早豐前病氣に付御役所へ不罷出人數參差致し候段關傳之允届

候とあるは即諫早家第十一代茂圖公に有之候

茂圖公は國防に餘程力を寄せられ候方のやうに被存候長崎港警固の任に就かれ候節は主として西泊の御番所に有申候文化四年には神島に砲臺を築造之に戍兵を置かれ候又同年に幕府沿海防備の議あるに際し領主は特に官の許を得て千々石灘に面する領内の中戸石村の牧島に貳座田結村に一座江ノ浦村三味線島に一座有喜村に一座設備居られ候も世には明に知れ居り不申候従つて同領主之御功績も湮滅と相成遺憾不尠候公の長崎港警固等に關しくはしく御承知もあらば御教示被下度候右御禮まで 早々

(242) 長崎縣大村の大村伯爵家の大村家覺書中フエートン號事件の史料を茲に紹介したい。  
長崎縣立長崎圖書館司書増田廉吉氏はこの大村家覺書の謄寫校合等に就てよく私の需に應じて助力された。私は茲に明記して感謝の意を表したい。

私は前に佐賀鍋島侯爵家の文書中英艦フエートン號事件に關するものを日英交通史料(八掲載の(235)及(236)又日英交通史料(九掲載の(239)及(240)等に於て紹介し又佐嘉鍋島家の家老であつた諫早男爵家文書は日英交通史料(八掲載の(237)(236)と印刷されて居るのは(237)の誤であつた事は日英交通史料(九のはじめに訂正して置いた通である。』及び本年報に掲載の日英交通史料(十のはじめに(241)として掲げんとして居るものゝ二ツである。それであるから鍋島家及び鍋島家の家老であつた諫早家の文書は一通

り終つたから私は茲にフエートン號事件に矢張關係のあつた大村家の文書を紹介するのには當然の順序である。

一文化五戊辰年八月十五日到夕方間役北條奎之允方々紅毛船壹艘相見候合印野母御番所江立候旨小瀬戸御番所々御注進有之候段波戸場役方より爲知來候旨申越追々右紅毛船野母御番所々二十五里沖江相見候段茂致注進候事

八月十五日

最前申越候白帆注進之儀今暮頃神崎口迄挽付候處江在留之紅毛人檢使被差出候處在留之紅毛人乗船右入津之異國船に可近寄といたし候内彼方々小船卸四五人乗組紅毛人乗船に及を以切進候風情に付差驚紅毛人船者引返し候檢使も同様御壹人は沖場に殘壹人御引返し御奉行所に御注進之段只今井上元助相見致承知候尤おろしや船之由にて御座候依而私儀御奉行所に即刻罷出候猶追て御達等之趣可申越候先此段早々申越候以上

八月十五日

北條奎之丞<sup>②</sup>

大村 右膳 様

大村 永學 様

八月十五日

今晩四時頃於御奉行所松平圖書頭様々今夕入津之船紅毛に無之彌おろしや船に候間湊内御領内固船早々御

① 大村上總介間役北條奎之允の事は丹治舉直著崎陽日録に見ゆ(日英交通史料(七)參照)。

② 北條奎之丞は奎之允とも記す。

差出候様御直々御口達御座候依而此段申越候

一船手之儀は急度手當之所於此方致用意早速罷出候様近村之給人足輕中にも早速觸出候付明日中には相揃可申候

一おろしや船之儀紅毛人乗組居候付諸方何も紅毛船とて已相心得居候處致旗合別條無之候付て在留之紅毛人差出候處手廻之儀仕出候所と同様諸方混雜相成候との御物語を仰聞候

一御奉行所御代官所々は最前御武具市中御用意等迄何も沖場に御運御手當有之候

大村 右膳様

北條 李之丞

大村 永學様

福田 濟士

御出入會所筆者

井上元助書中

おろしや人小船三艘に乗組湊内乗廻候處只今三艘共本船に乗歸候段注進有之候尤先刻茂戸町之方へ兎角乗廻候様子に付同所山手等御用心御座候様奉存候

一阿蘭陀人貳人おろしや船に生捕られ候相殘候阿蘭陀人何れも西御役所に迹參今晚中は御役所に被差置候事

八月十六日

一御奉行所御用人を以御達上候此節の船其儘難被差置候付依品燒潰しにも可致仰付佐嘉範之丞方に御手當候仰出候依之

此方様よりは陸之御固早々御手當被差出候様お仰出候尤其之所は先可被差置候然處右船神崎に罷立萬一未御當番御人數等不足にて出帆候而は決而不相濟儀故

此方様人數揃次第早々神崎にも差出候様委細は御兩家にて申談候様にとの儀に付直に御兩所にて罷出申談致候  
一右御固場所之儀井上元助申談候處江戸町大波戸樺嶋町筋等至而御手薄昨夜も右之筋之御奉行様御出馬御座候付而右之三々所御固被差出候も夜は此方に而致舟談候左候得は船手之儀年番少者頭等別段可お差出儀と存候此段心付申候故及御懸合候

一右御手當早々相揃候得ば格別之御勤儀相從候故精々御人數急急被差出候様にとの事に御座候只今も走出候儀も無心元成丈御急可成候

大村 右 膳 様

北條 奎之允

大村 永 學 様

福田 濟 士

御奉行所より言上之書付

以別紙申上候

十五日辰刻頃白帆船相見候段深堀詰松平肥前守家老致注進並野母御當所遠見番の者共々阿蘭陀船之段追々注々進申出候付檢使之者指出爲旗合在留紅毛人貳人召連於神崎邊右船に近寄候處右船而も紅白青之旗差出疑も無之阿蘭陀之旗印に付猶近寄通辯仕候處紅毛船に而咬啗吧仕出に候段紅毛語を以申聞候之間乗移可申處右船より小船卸十四五人下り立紅毛人乗船に近寄遂對談候趣に相見候處右十四五人之者共劔拔連水主を驚右爲旗合罷出候紅毛人貳人を召捕本船に連行理不盡之様子に相見候得共荒立候而は直に歸帆可仕も難斗候

③古今圖書集成、方輿彙編、邊裔典和蘭部彙考紅毛の部に咬啗吧、迦啗吧、刺巴となる詳細は本文の終に掲ぐる、Prof. G. Schlegel の考證文參照

付て其儘檢使之者罷歸右之趣申聞候先穩に取斗候に若ヲロシヤ船に御座候は、湊内引入蝦夷地亂防をも相糺積に付又々檢使之者差出本船に乗移召捕候紅毛人貳人相戻候様申付差出候若右紅毛人差戻不申手當等をも致候様子に御座候は、打捨候様申付遣萬一右紅毛人指戻不申其儘歸帆仕候様子に御座候は、右船打碎候様松平肥前守松平官兵衛に申達候右に付而兩御番所其外連れて相備候様申渡候事

一夜六時過小船二三艘人數二三拾人程乘組湊内に乘入候段注進申出候付早々召捕候様兩御番所に檢使を以及指圖猶又當所詰聞役之者にも其段申渡候處夜中でも於之不相分右小船乘備手合不仕候事

一右に付て大村上總介にも人數差出陸地相固候様其外近國之諸家聞役にも右之趣申渡此上類船等も相増候様子に候は、人數差出候様可申達と申達候委細之儀は吟味之上猶追々可申上候事

以上

一右之邊異國人共浦内小船を乘廻候聞有之候付御上戸町近郷に給人足輕小者追々差到其外渡邊藤一召連船手固到の點迄之間大浦に致出張候事

#### 福田固

士大將	大村	右	近
用人	大村	永	學
者頭	松田	右佐之丞	
	原三	嘉喜	
大目付	野澤	半七	

船頭	十九可也	淺田愛之進	山口琢助	小川十郎兵衛	今井才記	稻吉右岷	松尾右八	長井源藏	石橋五郎治	池田與七郎	山田幸太夫	一瀬十兵衛	松添甚助	元々附急役	鈴木彌忠太	河野種右衛門	楠本喜一	上野儀兵衛	與力
馬廻																			
外科																			
目付使役																			
組士																			
與力																			



別手者頭 千葉一郎

馬廻 一瀬多喜太

澁江武八

與力 田川武太夫

朝野四郎八

組頭 三根忠太夫

加瀬順右衛門

給人 今村平助

大給 林覺兵衛

郡奉行 今里九兵衛

福田御番所詰

大番頭 富永隼太

添番 酒井才八

在番 井石忠兵衛

大浦御固船

者頭 雄城左膳

外科 北野道貞

本職は長崎居合之醫者

目付 針尾 琢右衛門

與力 佐藤 森右衛門

嬉野 嘉兵衛

岡村 恵助

給人 一瀬 貞兵衛

貞松 領右衛門

富永 惣七

者頭 岩永 彌左衛門

岩永 孫左衛門

與力 浦田 幸八

河野 戸一郎

加藤 富五郎

峯 德五郎

給人 森 幸兵衛

大筒支配一手

大筒支配 千葉茂手木

小早三艘小船八艘

一 井村右門松浦鐵十郎出崎被仰付候事

一 右急變に付御城代者頭馬廻取頭中小姓支配御番頭御徒士頭郡奉行給人小頭中間頭と出張御達之事

先手火消一手

石火矢

飯笹林一七  
淵山武信

船頭

一瀬常右衛門  
今里只左衛門

郡奉行

森武左衛門

御用人

根岸主馬  
大村靜馬

者頭

内海采記

馬廻

今道廣治  
小佐々勝磨  
酒井苔之丞  
北條外衛

目付 指方新三郎

高瀬仁左衛門

矢次與左衛門

山口權平

一瀬市兵衛

一瀬直助

一瀬榮太郎

毛利小平次

一瀬悅右衛門

尾上卯右衛門

井手述右衛門

諸職人 拾五人

足輕 貳人

中間百貳拾五人

岩永直藏

徒百代足輕貳人

人足拾五人

郡奉行

嚮道

廻番二組

番頭 高尾熊太夫

馬廻 中村平八

與力 浦上多内

給人 原口勘兵衛

徒士目付 楠本内右衛門

鐵砲足輕六人

長柄足輕六人

人足七人

〃

番頭 富永真人

馬廻 筒井成三

與力 飯笹辨右

給人 北 八左衛門

徒士目付 鈴田富太夫

鐵砲足輕六人

長柄足輕六人

三町御固左之通

人足七人

大波戸者頭 朝長多膳

長柄奉行 渡邊唯七

馬廻 藤崎貫太

目付 田川庄右衛門

與力 長崎安右衛門

給人 中嶋源五右衛門

江戸町者頭 大村一學

長柄奉行 長井半太夫

馬廻 岩永多守

目付 岩永三藏

與力 橋口吟右衛門

給人 中村伴太夫

枇杷町者頭 深澤友右衛門

長柄奉行 土屋又四郎  
馬廻 富永守之進  
目付 朝長和太七  
與力 宮崎喜右衛門  
給人 岩永勘左衛門

一湊内固船御届且右異國船依品燒潰にも相成候付陸地之固並御番所人數不揃にて出帆候ては不相濟儀故此方御人數揃次第可被差出と被仰付候御届に追御手飛脚被差立候事

本陣詰

御家老	針尾大衛
御用人	稻田又左衛門
者頭	大村亘
近習番頭	村川求馬
	横山彌門
外科	近藤針庵
具役	快行院山伏

徒士目付

村部八兵衛

中間頭

原口彦九郎

郡奉行

池田八十平

相田半兵衛

外に三人

外に三人

勘定組頭

朝長想兵衛

勘定人

永  
三  
耶

納戸

蒲地源吾

手  
代

大浦覺助

給人

二  
尾  
頁  
之  
丞

一瀬 右助

中尾仙太郎

富永又助

富永又助

富永又助

富永又助



御普請方

福田兵衛

高瀬藤七

一瀬茂八

手明拾人

諸職人三拾人

内大工貳拾貳人

内木挽三人

同杣取三人

同掃除番貳人

福田直三郎

坂本孫右衛門

徒士

旗之者拾壹人

人足五人

手筒之者六人

弓同心拾壹人

鐵砲同心拾壹人

長柄足輕拾八人

板敷波戸支配	内海郡治
長崎元々附	江頭庄兵衛
人馬方郡奉行	大給納戸
小給宿割	一瀬悦右衛門
代官	浦上人馬方
代官	伊木力人馬方
代官假役	時津人馬方
中村藤助	松添仁兵衛
吉川源左衛門	
一瀬久右衛門	

一今夕御奉行所御呼出に付北條奎之允罷出候處御居間に佐嘉間役兩人一同被爲召御直御密談被仰聞候は異國人共野榮等被相與處壹人之紅毛人は指戻候由今壹人は牛野牛差遣候は、可差返無左候は、今曉に唐船日本船共燒討可致右望之品々差遣候は、紅毛人差戻明朝出帆可致旨に相聞候由に付御奉行様にも甚不埒の至に被思召何分其儘難被差置天下之御恥辱とも可相成に付て牛野牛等被相與候上今曉燒潰に可被成由に而御當番方に其手當被相達は御奉行様には御番所に御出張被成候付に

此方様に御役所御引渡被成候間今晚中御甲冑御支度に而長崎表被成御出張候様大早追を以御奉所に可申越旨且出張之面々は未相揃候哉など誠に御指詰之御口上甚驚人候御氣色之由右之趣やはり佐嘉様衆同座にて被仰聞候付奎之允申上候共上總介も今晚中は勿論明日中にも御當所に到着何分出來可申哉甚以無心元奉存

候且出張之者共儀も御尋有之候付申上候には未着崎之徒行御座候得共是は追々引續到着可仕と奉存候旨申上候扱又佐嘉様衆被申上候とは未同勢相揃不申何分にも日合無御座事故行届かね候勿論人數不足之儘に而異船方取懸候てかへり討にも逢候とは却而天下之御恥不淺哉の趣共様々と御宥被申上候由候得共中には御聞入無之壹艘之事に候得共何分にも仕法可有之様被仰聞候且愈々如何成御手當共に候哉到此節不被御行届儀共候而は天下之御恥辱御厭は無之候など甚之御赤面誠一世一代之御差はたりの御様子に而兩人共に大に致仰天いづれにも手當方精々心配可仕旨申上御側致退出候右之趣渡邊恒三郎立役一作委細申含早打を以今曉四時頃到着之事

一諸士中段々出張被仰付候故御在所御手當左之通

御廣間

御城代 大村 靱負  
者頭 福田 友江

馬廻 兩人  
給人 兩人

本本路 稻毛 伊左衛門

異船渡來に付者諸士中長崎出張被仰 上小路 小佐々 貢

付候付各とも小路警固殘番被仰付候 外浦小路久深 稻垣 主計

小姓小路 岩永 早馬

草場小路

岡 彌 太 夫

吉 村 要 七

片 山 右 伴

常 井 枉

岩 永 少 武

大 村 雅 之 丞

大 村 千 治

富 井 直 太 夫

右同斷に付加番助被仰付候

諸士中長崎に出張被仰付候間其元儀浦上に出張罷

在何用混雜無之樣繰出可申候

一此方半屋警固左の通被仰付候

馬 廻

朝 長 奥 左 衛 門

上 下 貳 人

上 野 元 之 丞

上 下 貳 人

外 様 足 輕 貳 人

山 口 磯 右 衛 門

湯 川 又 之 丞

諸士中長崎出張被仰付候付御城御廣間御番各に被仰

付候條兩人共え申談無愉意可致出番旨

何も有給部屋住

田中兵内  
村部藤助

異船渡來諸士中出張被仰付候依之各儀御雇にて御  
城火廻番被仰付候條夜分兩人充申談無愉意可相勤旨

朝長左平  
岩永市藏  
中尾與八郎  
飯笹市之丞

一今度長崎表致渡來候異國船八月十六日晚中燒潰候様御達有之候段注進到來に付御城釣鐘爲撞碎而諸士中御  
本丸に駈集候事

江戸御注進早追御飛脚被仰付候

今道左助  
山口市九郎

一江戸早追御用人可被差立之處當時無人に付左助に被仰付候

八月十七日

一右之通長崎警固被仰出候付て公邊御届侍飛脚山口市九郎被差上候事 但御振合替候付て今道左助御免  
一深澤職茂戸町大浦陸地押被仰付八月十七日九時頃罷越候事

一同日御奉行所の聞役北條奎之丞罷出大波戸固市中廻番火消急人數差出候儀如何可相心得哉之旨相伺候處伺之通差出候様被仰出候付直に出張之儀申達候事

一大波戸出張急成事故幕杭を立手幕を張者頭其外與力迄壹間床四宛並一薄縁を敷其上に併居行儀正しく相守具足箱之儀は併居候後に相備鑓之儀は長き竹を結び候て建置之無程及暮候故御紋付高張拾五張者頭自分高張にて相用十七日晚五時過頃迄相固居候事 外浦町吉雄幸宅作を借請各替なく辨當をつかひ候也

一大波戸正面之藥師寺久左衛門石火矢に而固此方御固は西御屋敷石垣際に流幕打候事

但三町固之面々異國船出帆跡に相成候付此處を固候也

一御奉行所の大村右近並大村永學松田御右佐之丞右兼て鐵十郎同道罷出候事

一鐵十郎御奉行所の申上候は今様之節は領内福田表の士大將罷越相固候例に御座候得共此節格別急變に付而先御當地の罷越候如何相心得可申哉之旨御伺候處御奉行様にも御承知被成福田表の致出張様被仰達候付て右近始永學右佐之丞其外之面々直に福田表の致出張候事

一右の通付而

太守様早々御支度御伺十七日曉七時頃板處波戸の御乗船被遊候事

但太守様御陣羽織に而御采幣被爲持御供中陣羽織着之。

一時津御渡海御船中風波強押て御渡海十七日午刻被遊御着船候事

一時津の鐵十郎罷出異國船燒潰之儀は被相止候由達御聽候事

一右之通候得共即刻

御出馬浦上御茶屋に御立寄被遊御出崎候御行列左之通

一 御 旗 竿

五本

一 御 鐵 砲

二

一 御 玉 箱

一

一 御 弓

二

一 御 矢 箱

一

一 御 具 足 箱

一

一 御 兵 具 箱

一

一 御 刀 箱

一

三 荷

一 御 挾 箱

三

一 御 經

一本

一 御 小 馬 印

一本

一 御 加 ○(一字不明)

二本

一 輪 違 御 鎧

二本

一 千 羽

一本

一 御 臺 笠

一本

一	御	蠟燭	
一	軍神別當		
一	具持		
一	太鼓役		
一	御挾箱		
一	御徒士		
一	御打物		
一	御馬		
一	中 <small>小</small> 姓		
一	御 <small>十文字</small> 鍔		
一	御傘		
御床机持			
一	御草履取		
一	小使		
一	御茶辨當		
一	御坊主		
一	御牽馬		

二本

拾三人  
二



一 一 一  
押 合 沓  
羽  
籠 箱

軍 神 別 當 假 役		御 醫 者		馬 廻		御 側		大 目 付		御 番 頭		御 用 人	御 家 老
和 田 勇 記	林 正 榮	村 田 元 雄	本 川 自 仙	山 川 周 淳 <sup>④</sup>	中 村 平 八	富 永 眞 人	宇 部 繁 記	福 田 衛 間	野 澤 半 七	横 山 綠 門	村 川 求 馬	稻 田 又 左 衛 門	針 尾 大 衛

④ 深川晨堂氏著大村藩の醫學第十七頁山川周淳の部參照

徒士組頭

馬奉行急

御馬副

御立具方

御野物方

御細物方

中小姓

御右筆

神尾八十八

須田丹六

岩永秋之丞

瀧口荒之丞

稻田左貫

根岸尙人

品川丹司

楠本官太夫

和田藤三郎

今里德太郎

福田 鄙

村川雅樂之進

富永本藏

井手左久馬

藤田仲右衛門

澁江永記

中嶋理右衛門

北村平八郎

御用番 村田勝左衛門

茶道 浦上自悅

太鼓役 福田長左衛門

與役  
御膳奉行 有田貞六

一 奎之丞御呼出に而異國船出帆御書付被相渡候

但出帆御達之檢使異國船に參着無之内出帆之由追々帆影見隱候事

一 太守様未刻過長崎御屋敷御着座直御奉行所に御使者被遣候處異國船之儀は歸帆申渡最早穩之取斗候付御陣羽織之儀は被召替御上下に而御見廻被成候方可然尤御供中之儀は陣羽織にても御勝手次第之由被仰聞候事

一同日七時迄御奉行所に御出御對話御勤向相濟御歸懸高木作右衛門にも御出暮頃御歸館被遊御止宿候事

一 御奉行所に奎之丞罷出御用人に面談明十八日上總介引取可申哉又は今暫見合可罷在哉之旨相伺候處最早出帆も致し候付御勝手次第御引取相成可然旨被仰聞候事

一 御奉行所より諸々出張之面々引取候様御達之旨有之候事

御奉行所より言上之書付以別紙申上候

一 昨十五日申上候通異船に召捕候紅毛人貳人爲取戻差出候檢使之者通詞罷越異船に乘付可乗移致致通辯候處夜中之事故乗移候儀は斷申間に付通辯を以相尋候處辨柄國船之段申聞船中水薪無之候付明朝に至相與候は、捕置候紅毛人可差戻と横文字差出候付て任乞翌十六日朝相與候處捕置候壹人は差戻又々横文字差出在留

かひたんの相送候付和解申付候處半若野牛相與候は、殘置候今壹人之紅毛人差戻可申旨和解差出候付任乞相與紅毛人差戻候様申遣候處則殘置壹人之紅毛人も差戻候事

一 右異船に召捕候紅毛人貳人共差戻候付當津に渡來之仔細相糺候處處ハク月以前三百五拾人乗組本國を罷出候辨柄に船寄せ候處阿蘭陀船當年御當津に貳艘仕出候て渡來仕候段及承候付當津迄も慕ひ來妨候心組にて乗組紅毛人兩人論計を以召捕候はエケレス國横文字言語も違候國に付書翰相認通辯致させ候ため紅毛人貳人召捕候得共對御當國不敬等致し候儀は會て無之御當國には當年は阿蘭陀船入津不仕候由に付早々出帆可仕候處薪水食物等乏敷候付右品々乞請紅毛人貳人差戻候付早速出帆仕重て御當國に船入申間敷旨申間候段筆者紅毛人承かひたん横文字差出候付則和解相添入御覽候事

一 右異船最初かひたんの相尋候處エケレス國兵船之由申聞其後かひたんの遣候横文字にもエケレス船主の認有之候段申僞候得共右船初て阿蘭陀船咬啗<sup>⑥</sup>仕出之段申僞阿蘭陀之旗印を差出其後辨柄船之旨申聞又はエケレス船之旗印に相違無之段かひたん申間候事

一 右エケレス船におろしや人乗組有之候哉相尋候處エケレス人之儀はおろしや人共形替り壹人も乗組無之段被召捕罷歸候紅毛人申候段通詞共申間候事

一 右に付早々致歸船候様檢便を以申遣候處右檢便之者右船に參着不仕候内出帆仕候段檢便之者罷歸申間候事

一 松平肥前守家老諫早谷兵衛人數差出候旨御役所相屆候事

一 大村上總介番船並陸地固人數差出候段届出候事

一 異國船出帆に付近國之面々領内浦々入念候様申達候事

⑥ ケンパル原著志筑忠雄譯鎖國論  
澳門記略下卷喇巴の部  
志筑忠次郎(忠雄)稿本萬國管窺  
新井白石著采覽異言  
寺島良安著和漢三才圖會

以上

一出嶋紅毛人共異國船に取驚銘々駈出西御役所罷出御助被下候様相願不一方騒動にて十五日夜は御役所へ御留被成候事

一出嶋並江戸町大波戸花嶋町五嶋町大黒町所町人一百に大勢出張相守役人中都而帶刀御免之事

一十五日夜長崎にて觸出置候近村浦之給人並足輕小者等翌十六日朝迄追々到着に付て渡邊藤一右之者共召連

大浦へ致出張候事

一太守様今五時頃益御御機廢能長崎御發駕時津へ御渡海同夕七半時頃被遊御歸城候事

一御歸之節も御騎馬御陣羽織被爲召候事

但御供中も陣羽織着用之事

一此節出張之面々書出候様從御奉行所被仰達候付左之書付差出候

大村上總介人數左之通

大波戸

者頭

朝	長	多	膳
大	村	一	學
岩	永	彌	左衛門
野	澤	半	七
渡	邊	唯	七

一 弓 拾 張  
 一 鐵 砲 拾 挺  
 一 長 柄 拾 筋

物奉行

大屋又四郎

長井半太夫

岩永多聞

馬廻

藤崎貫太

三根彌八郎

橋口吟左衛門

浦田幸八

峯德五郎

一瀬唯二

與力

岩永孫左衛門

上野儀兵衛

永嶋茂兵衛

鈴田彌忠太

市中廻番火消息

者頭

深澤友右衛門  
横山彌門

役馬廻

富永真人  
高尾熊太夫

馬廻

富永聞之進  
筒井成三  
小佐々勝磨

徒士目付

中村平八  
有田貞六  
朝長和太七

給人

一瀬十兵衛  
井手述右衛門  
池田與七郎  
一瀬悅右衛門  
岩永勘左衛門  
足輕貳拾人

船手固

者頭

雄城左膳

大筒支配

千葉茂手木

目付

針尾琢右衛門

與力

佐藤森右衛門  
嬉野嘉兵衛

石火矢役

飯笹林七  
淵山武信

給人拾人

弓同心拾人

鐵砲之者貳拾人

長柄者 貳拾人

小早三艘小船八艘、拾壹艘其外小使船

福田固

士大將 大村右近



目付使役		醫師		馬廻		取頭	大目付	者頭	用人
弓同心	貳拾人	給士	拾人	給士	拾人	松尾	右八	長井	源藏
稻吉	右	江頭	周	達	小川	十郎	兵衛	富井	直太夫
山口	琢助	淺田	愛之進	今井	才記	十九	可也	野澤	半七
原三	嘉喜	松田	右佐之丞	大村	永學				

鐵砲之者五拾人

同所番所給

大番頭

富永隼太

添番

酒井才八

者番

井石忠兵衛

同所船手

大砲者頭

千葉一郎

馬廻

一瀬多喜太  
吉村要七

與力

澁江武八

田川武太夫

朝野四郎八

田川覺右衛門

組頭

三根忠太夫

加瀬順右衛門

大砲方拾人

鐵砲士 三拾人

右之外總人數之儀は領内浦上村時津村長與村三ヶ所に出張相控罷在候以上

辰八月

大村上總介内

北條奎之丞

松浦鐵十郎

一諸々固人數之外兼て異變御手當被仰付置候面々浦上或は洗切或は時津迄致出張候得共穩相成候に付連て引取候事

一右付て始終

公邊御届左之通

口上覺

異國船壹艘昨十五日長崎表就渡來湊内領内固船之儀松平圖書頭より彼地差置候私家來之者に被相達候付早速差出此段御届申上候以上

八月十六日

口上覺

昨十五日長崎表渡來之異國船其儘難被差置依品打碎候様可相成之候依陸地固差出候様且右船神崎に罷在

萬一御番所當番松平肥前守人數不揃に而出帆候而は不相濟儀故私人數揃次第神崎にも可差出旨松平圖書頭より彼地差置候家來之者に被相達候付而早速陸地固人數船手之固差出候以上

六月十六日

口 上 覺

昨十六日申上候長崎表渡來之異國船其儘難被差置船故同夜中燦潰候積に付松平圖書頭には其場より出張仕長崎御奉行所明候付私儀甲冑支度に而罷越御奉行所相守候様彼地差置家來之者の圖書頭より被相達候段申越今曉子刻承知仕候依て急速支度領内時津に渡海罷越候積にて今曉寅刻出船仕候此段御届申上候以上

八月十七日

一筆啓上仕候

公方様大納言様愈御機嫌能被成御座奉恐悅候然者去十五日長崎表に異國船渡來付て私儀昨十七日彼地罷越松平圖書頭對話仕候處右異國船出帆外に相替儀無御座候旨被申聞候依之在所罷歸候右之段爲可申上棒懸札候恐惶謹言

八月十八日

松(平)伊 豆 守 様

牧(野)備 前 守 様

土(井)大 炊 頭 様

青(山)下 野 守 様

人々御中

安對馬守様

人々御中

口上覺

最前御届申上候今度長崎表に異國船渡來付而私儀領内時津え渡海長崎え罷越候積にて昨十七日曉寅刻出船仕候處風波強相成候得共押而罷渡同日午刻時津着船之處異國船燒潰之儀は被相止候段承知仕候付而着服等相改即刻同所發足未刻過長崎藏屋敷到着追々御役所へ罷出松平圖書頭對話仕候處右船致出帆外に相替儀無御座候旨被申聞候此段御届申上候以上

八月十八日

口上覺

去十五日長崎表異國船渡來付而陸地固且船手之人數差出置候處右船出帆帆影見隱候付固人數船手共引拂候様彼地差置候私家來之者え松平圖書頭被申聞依て追々人數船共引取申候此段御届申上候以上

八月十九日

十一月十日牧野備前守様にて左之御達書被相渡候

一原は話に當八月長崎え異國船渡來之節其方儀爲警固早速從在所罷越候段心懸宜故と思召候此段一々相達旨依上意如斯候恐々謹言

十一月十日

青山下野守

忠裕御判

土井大炊頭

利厚御判

牧野備前守

忠精御判

大村上總介殿

一御奉行松平圖書頭様八月十八日曉被及御大變候段風聞有之候付佐嘉聞役え承合候處彼方にても其沙汰之有候由然處井上元助ゝ内々爲知來候付太守様御途中え北條奎之丞罷越候得共時津御乗船後相成候付居合之船ゝ御船え奉追付右之趣御内々達御聽候事

但此節燒潰被仰出候得共御當番佐嘉様御手當被行届兩御番所え定番之者漸く五六拾人も居合候哉に付右之御手當外れにて致出帆候付御奉行には御變死之由扱又佐嘉様には右之御咎にて百日之逼塞被蒙仰候

(追記)

予は本年正月長崎市役所長崎市史編纂室所藏圖書中より次に引用の和蘭東印度言語及土俗雜誌掲載 Prof. G. Schlegel 氏論文中より咬啞吧に關する考證文を見出した。

Bijdragen tot de Taal-Land- en Volkenkunde Van Nederlandsch-Indië uitgegeven door het Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land en Volkenkunde Van Nederlandsch-Indië vijfde volgrees-Achtste Deel (Deel XLII der Geheele Reeks) 's Gravenhage, Martinus Nijhoff 1893. De Betrekkingen Tusschen Nederland en China volgens Chinesche Poennen door Prof. G. Schlegel.

古今圖書集成

Koe Kin toe schoe tsin tching.

方輿彙編邊裔典

Fang-yü loei-Pien Pien-i tien

和蘭部彙考

Ho-lanpoe loei Khao

紅毛

Rood-haigen

Na dien datum is Java nice langer bekend onder Zijne inlandsche namen Djao oa (Java) Yepotui, Schepotahi (Java dwiipa) Kaing, Poe-Kia-loeng (Pekalongan), Soentat (Soenda) enf, naar Krijgt den naam van Kalioepa (咬啞吧 of 喇吧) of Kalapa (噤刺巴) naar den inlandschen naam Noessa of Soenda-Kalapa, de oude naam van het latere Jakatra en Batavia.

以上引用せし處により古今圖書集成、方輿彙編、邊裔典、和蘭部彙考紅毛の部に咬啞吧 (Kalioepa) の事を記する事を示す。我校圖書館所藏本古今圖書集成四十二函邊裔典第一百六卷和蘭部彙考參照

(昭和八年二月二十三日於長崎高商圖書館追記)

(1) Die Principaalste Haven Vant Eylant (Java) is Sunda Calapa (v. Linschoten). Jacatra, Porto d'Olandesi, gia Sunda Calappa (Arcano del mare). Zie Tiele: "De Europeers in den Maleischen Archipel" — Hageman, Gesch. d. Soendanden.

(追記)二、拙稿日英交通史料(九)抜刷には訂正を加へたれど本誌に訂正し能はざりし部分を左に追記訂正す。

日英交通史料(七)所載丹治舉直君崎陽日録中訂正

末文に長崎奉行たりし松平圖書頭の法名を現光院に殿從五位下圖書頭俊雄淨譽大居士とあるは現光院殿從五位下前圖書頭俊譽淨雄大居士の誤、長崎大音寺に在る墓石參照

日英交通史料(八)中誤植訂正

日英交通史料(八)に掲載の和蘭商館員蘭文書翰を筆寫説明せる(238)故エルネスト、サトウ氏藏書中の寫本の複寫の印刷に誤植少なからず、故に茲に訂正し置くべし。

No. 1 Een Schip van Bengalen is gekoomen den Captain Zyn Namen is Pellew zyn Ed: heeft gehrek aan water, en allerley provisie; Hetzelve verzoek den Capitain dat hem gegeven zal worden.

No. 2 の書翰には captain は Captain, on は en と改め、(was get:) はサトウ氏の寫本にはあれど削る方可ならん。

on Koebesten は om Koebesten と改む。

Nangasakie は Nangasackie と改む。